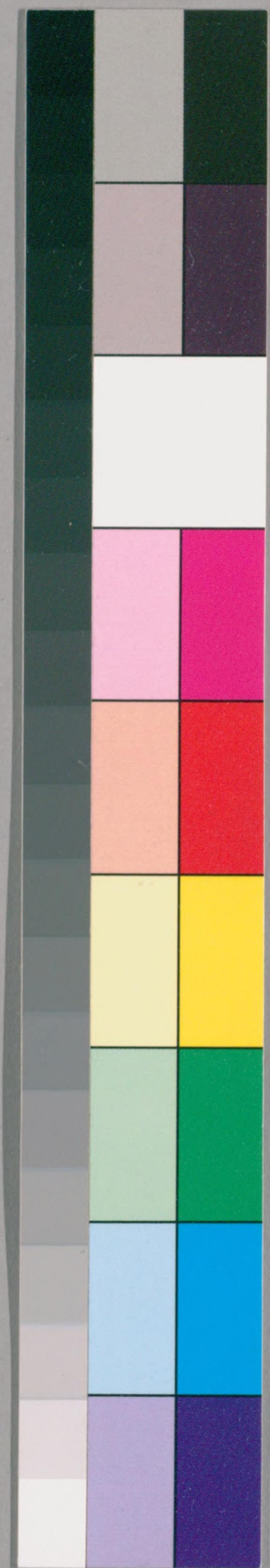


特1  
1505



国立国会図書館 タイトル『雲根志 前編5巻』 請求記号 特1-1505

ガラス使用



雲根志

宋用類

卷之二

前編



水銀 異石 磁石 玄石 蛇眼石 文字石 石脂 消石 卯石 黃

一 三 五 七 九 十 十三 十五 十七

自然 蜜栗子 磁石 石炭 石王 石筆 滑石 炉石 禹餘糧

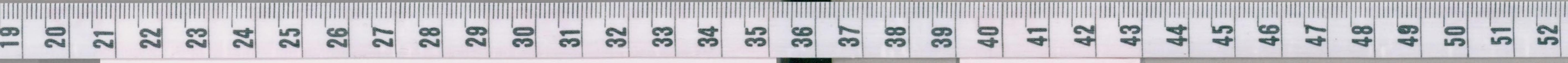
二 四 六 八 十 十三 十五 十六



雲根志

卷二

目一





特1  
1505

長志

卷二

目二

燒山石 附石 不灰木 自然灰 鯨脊 碁石 温石 磨砂 吸石 銀垂石

罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌

石山石 浮石 石灰礦 石塔 魚鳥腹中石 臘石 蛇骨 薰陸 燃土 山浮石

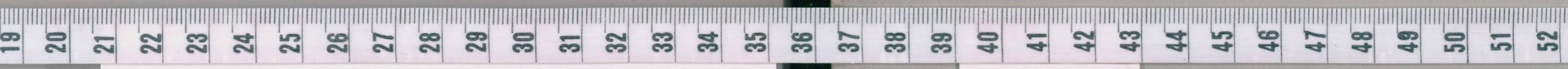
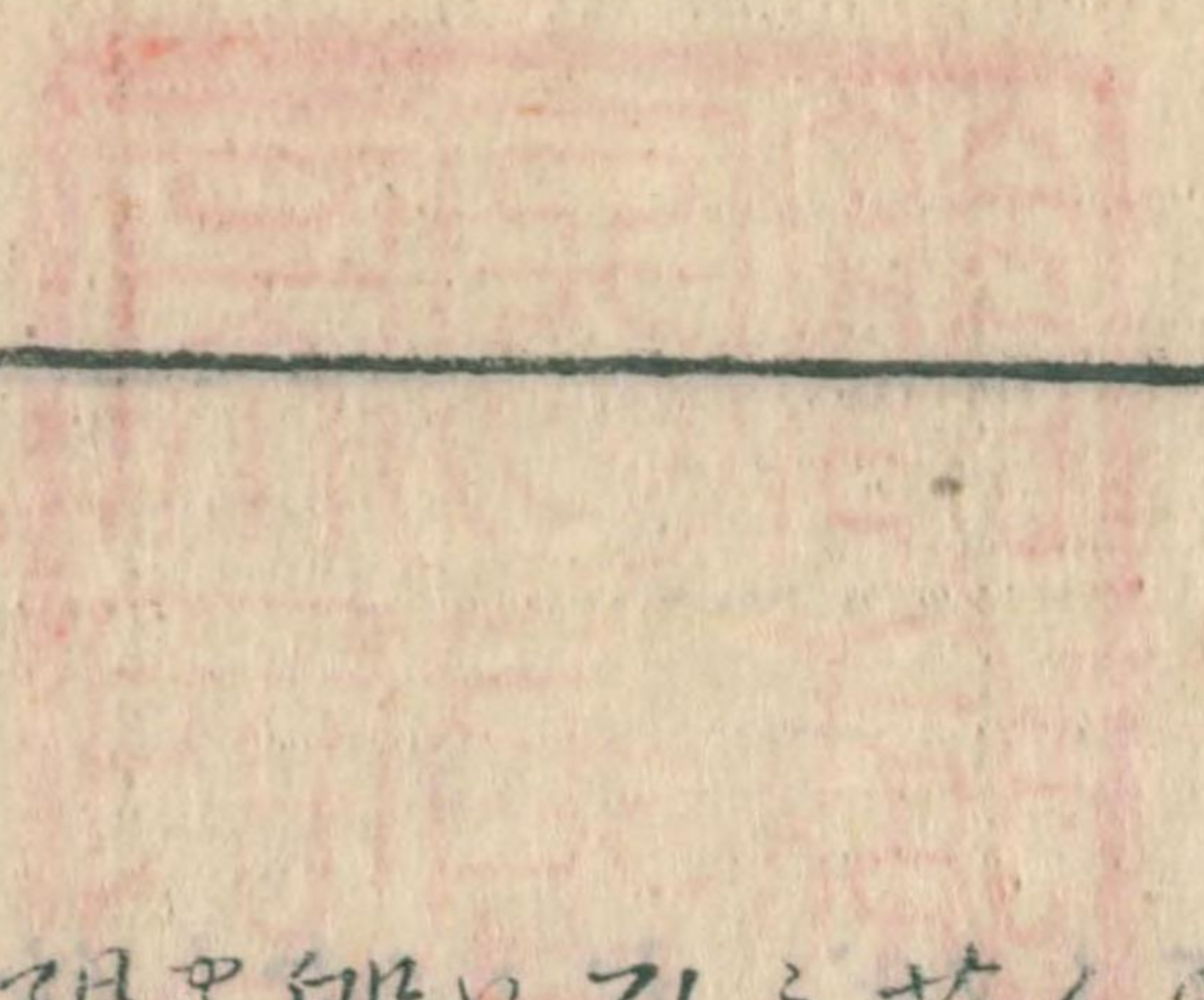
罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌

紫金石 玄精石 南蓬砂 陽起石 殷孽 孔公孽 花瓷石 寒水石 硬石膏 石中黃子 太乙餘糧

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

井泉石 火打石 石硫黃 鳥地獄石 土殷孽 鵝管石 石鍾乳 冷油石 方解石 石中膏 石中黃

罌 丸 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌 罌





燒物茶	奎	オクリカキリ	奎
クワウルステイニ	五	水瀝石	六
ギヤニ	七	金礦石	八
銀礦石	九	鐵礦	十
錫鉛礦	十一	金剛石	十二
丹砂	十三	礬石	十四
膽礬	十五	鼠殺石	十六
雲母	十七	真珠	十八

雲根志卷之二

採用類

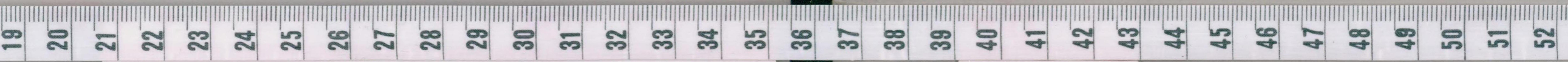
水銀 一

江州山田浦木内小繁重曉著述



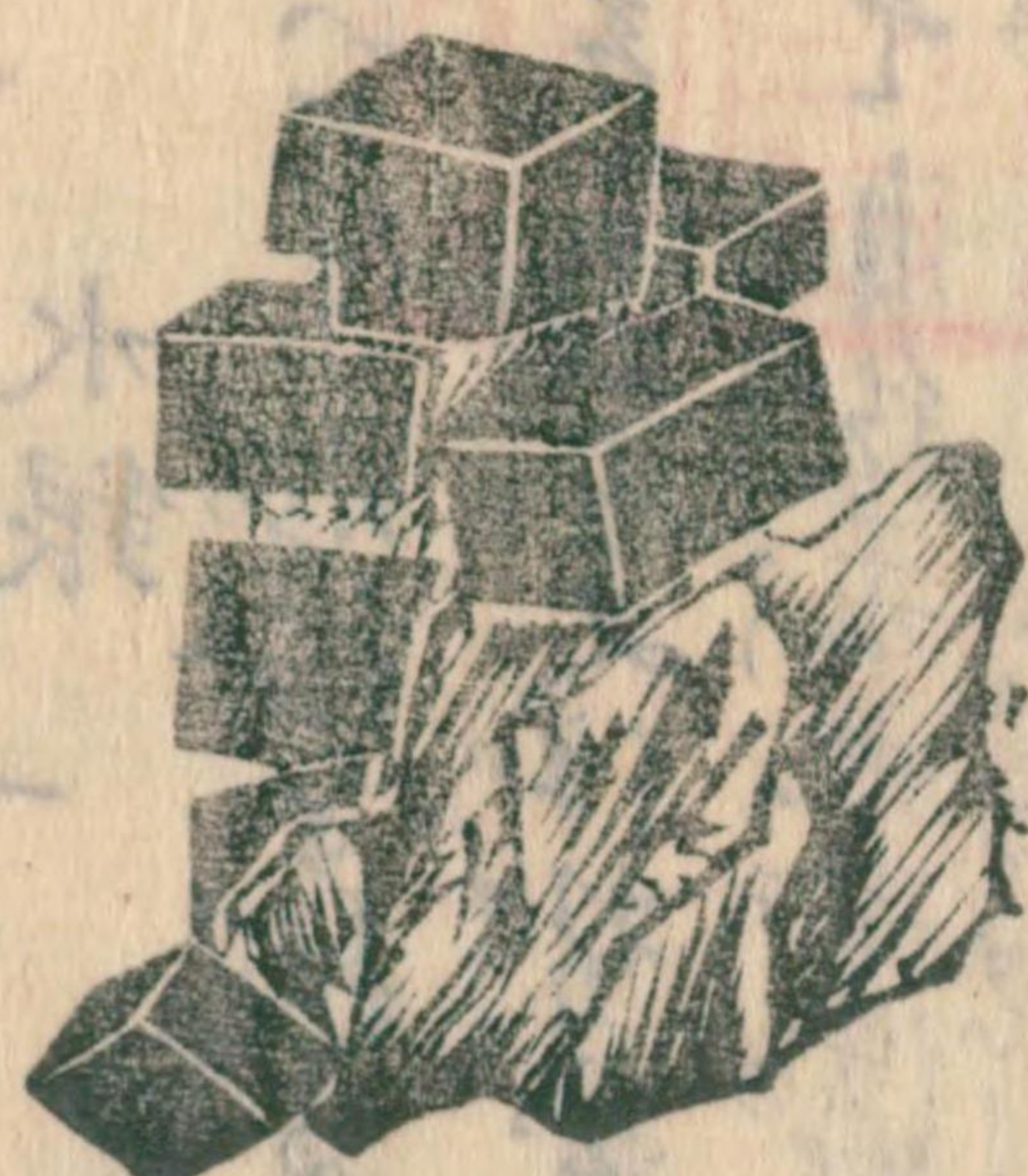
和銅六年小水銀を教ふる事徳日本紀不見たり今之飛騨に  
 あり多し又伊勢丹生村山中土石の間より自然に流  
 出と云ふは永也安濃津北城下より出又礦あり石を燒  
 じ水銀を取也或人松丹生村水銀礦を手に取て是を  
 軟滑にして色白く手小振るるに冷り  
 るる事を以て江府田村先生紅毛玉の産冷油石と云物を  
 あり云ふは是なり

自然銅 二





和産多しといふも其物小何れ方金牙此種類之や多年  
 乞掛るといふも人あつてさやま一志る宝蔵十口又月廿二日  
 浪兼戸田史生産物舎に備前虫の産物を自然網を産  
 芝物之濃烈志坂山小其物稀あり玉取之大方る物難得や  
 方りて一寸四面粒粒を連綴此物を産を礦石小似て別物之



飛列金山サイサキ  
 色鉄ノ如ク黒赤  
 光大サ如量

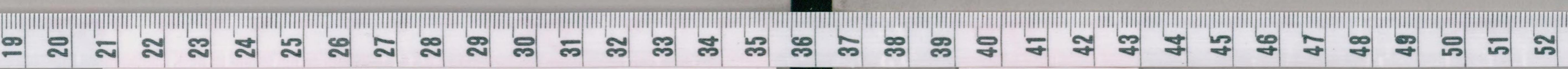
無名異 三

私名あり一近江石見國よりて江府田村氏取寄る玉取之大方

葉種粒のやく印皮思く堅一中軟くして赤出あり俗名  
 て血止小用也本草及之才家舎尋て見り時ハ赤大之又葉  
 店の漢産此古法を以てて葉種粒のよ

蜜菓子 四

和産和名あり一近來海産の流りもさう久只徳書小説形  
 状を考るのそ英濃は加見那石原村之宅葉持来る一石さ形  
 葉此如く色青黒くそ堅く印光沢ありて石中赤く軟あり  
 葉の紀しつる物も何れも今并珍産を以てて是蜜菓子  
 名之此合石小似て痣なく羽色なく無名及小似り無名  
 是れ堪るも名づくも或人の説小尾張必加茂教平之村小  
 ありや





蛇含石 五

黒色鉄丸の如く一を管へ大なる物へ概粟粒如く小なるは  
 豆粒のごとく碎て石中銅色之外瘡ある所より瘡を採り或は  
 自然銅を採り或は形状如種々そ和産稀之相模  
 西大井川の下持淵山濃乃赤坂螺谷等には濃産小是等は  
 大蛇含中宮下居る時小舎といは非之乎葉を以て銅礦の  
 一種なり

磁石 六

近代本邦如く小産のを色黒色に黄赤く鉄の如く是  
 濃産於上又苗木山奥列南於侍後野山或は甲乃等より出せ  
 ず此地は尺余の劔刀を吸ゆるは物は後より一寸或針を

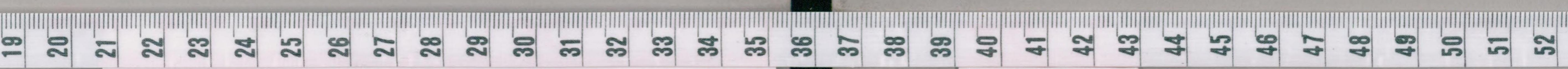
吸ひ強りとて南を指事は針を以て石を磨き針  
 を水に浮ら小忽磨たら方七尺指を磨産小劣るなり

玄石 七

玄石の磁石の鉄を不吸物之磁石小是なるなり産亦又  
 同和州二上山小産の磁石と見えて皆て鐵を不吸  
 物あり玄石なるべし

石炭 八

石炭小産一も黒く炭化のごとく木の如く實は石之山中  
 掘りて實は薪木より用也其は身は物なり考方には元來木  
 此化したる物なり和名多し筑紫國是時より王正石と  
 して伊賀山に於てあり山と云をせ成爲れ白に香を出





雲丹とも雲の梅れ花道に玉甲斐郡湯掛村よりそと新  
用ひば不しそ岩木と云日必栗を郡岩根村よりありウシ  
と云土ウレ木ウレ此二種あり土ウレハ不用予去年そ家より  
自堀刃るより根源石小あり次木之山中不跡在るありせ  
大本を本づく枝根とも小あり長門必和木村よりかき石  
と云丹後より石スこと云美濃必本栗新吉村相控玉縁  
倉油井渡上野石料中立案紀別熊野尾張伊勢志広る  
出雲より石之半あり本栗柔るへ去之去中小ツシモと云  
物あり本栗の塊あり地より出れより一葉小用也石炭と  
同種之由に必栗を郡小多一俗小往古の由に栗と云稀  
小異取れ実もある

砥石 九

本邦より砥石の産不き多し梨園青砥木種果又多し  
よつて大略をくくおと近江は砥石之河玉名倉砥石上野  
戸沢砥石紀伊種子濱砥石但馬砥石筑後天草砥石對馬  
北青砥山城玉小山宮雄小名産あり高野砥石つ小砥石の  
あよ高野産る砥石れ山のありくさひおのり刀をこき次と云

石玉 十

凡そ石玉といふは石のあり黒色よりそ白筋ありを石玉樹  
と云く磨れよく或は竹の画に似たり高し上流の視之本朝  
砥石流の石玉といふも文字固石玉子に及ぶあり併云砥石  
天皇は和石玉子と名けりと今此





高山へ入る津を林をたもとてゆかて一橋あり價貴し

文字関石 土

大佐屋敷の所津井所沖の海底に産本朝磯石の至りあり  
文字関石と名く又大佐の青石或は鳩磯石といふも青  
石として赤い所あり毎年二月三日大干涸して二十余り遊  
を言ふり此例もて南地西寺に傳あまきと出て海邊に立  
て鐘をよそそ鐘鐘なる間小沖へてくしおてむりて此  
此中こそ指ひゆり今いゆ中こそいゆるかき水中小鐘  
て石をよめて抱きよるる之鐘鐘の時潮もらくる石をい  
かきよて急し陸へてくまら又奥にラガチの海中より磯石  
あり名取之石も二月三日大潮の時は底に沈て採るるとい





石筆 十三

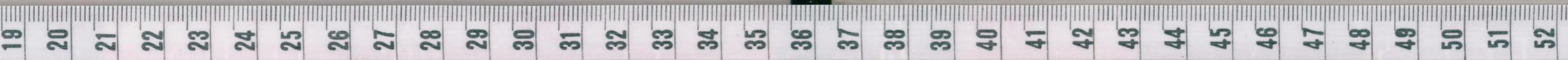
山城山科の牛尾山観音堂れうろの石ありて  
 筆より用ゆと 宝曆十二年此甚い山のぼりたがひん小  
 堂のうー流したる此れまらちより此の石なればぬ  
 流定とれあり全停まくわらぬにふんをて書と墨のじ  
 あれおせらうと云石脂之紀列美山は南朝甚山變別白山杯  
 小あらしは物又云と云筆あり遠に山崎田より二里はより  
 小千草村より府平賀氏ぬ久出て今も山崎をたぐ  
 切て懐申の筆より用中右より石筆おんぶよりりてはま  
 赤墨れ二種ありそ外私産是赤の石筆今れまら  
 ちより出る石脂の條よりり

石脂 十三

石脂 ありてありまらちむわら  
 石脂も黄赤白黒紫の六種あり私産を多し 聖滑石似て  
 阿ふらけありまらちむわら脂之大私玉吉野那十付川小石  
 村より石脂あり里人これ氣とよは玉南於春日山水谷台小青石  
 脂あり黄へ勢別柳原温泉の近山小生れ又但加りも有り是の  
 肥後熊本城跡牛尾山観音堂の城小かば不考 聖滑石と云  
 又肥後千里ヶ渡に青い依傍小生れ家白の二種山城白川山  
 丹波古法小出は赤紫の二種紀伊熊野赤い濃赤坂山白は  
 下野日走りもあり

滑石 十四

滑石 ありてありまらちむわら  
 滑石 ありてありまらちむわら





かきし大暗色白く災滑りやてやうらうらあたる久し一船  
東のこの白滑石の今和者ふもあり宝曆十四年八月  
浪花戸田先生産地地志小出らふも和者茶の口種之記  
熊野山中の産ありと和者大和信貴山寺の茶と産地  
白滑石英徳玉加思石村の山中白坂近山此産の白滑石  
やうらうらしてけあけありかきし久し一船ありと  
ころ産小異ありとあり一志と地産後波の玉根香山  
出る赤滑石といふとやけぬじうなる波

消石 十五

近江徳玉小出を伊豆玉後波玉小芒消といふ地あり越中に  
青鹽消といふ地あり一志遠江佐波員地後安後小

白塩消といふ地あり一志を和ぬくふ見らうとあり  
又赤消といふ地あり一志あり本草によきは甜消風化消鹽  
消益消英消朴消馬牙消芒消苦消等れ名ありと一地  
一とせんト移りてかきしを異ふ一志を異し一機能を異  
よとらと見たり

燻甘石 十六

那耳石和産稀なり産地今小和産おといふも産所は  
多びららるる地長列の人よこれを和を後産不とら  
ぬ事とも志れむかきし白く滑石小地皮あり皮の下はく  
ありて石髓玉髓のこけ地やうらうらして地産あり大なる  
このまれの和と四月十五白滑ひぐ一の今沉香草を





石の地大さ本まらうれし

卵石黄 十八

禹餘糧太乙餘糧石中黄石中黄子多一抱うて卵石黄物  
小卵石今俗石卵といふ抱の内にありそる卵といふ抱も  
亦散種あり年紀石能堅山系我味うて之卵を焼く大  
山の一體をうてそるの破せしは卵子れどとき九さそるは  
らむそるも黄志一予菓まらうおそるそるは是本まらう  
卵石黄まらう

禹餘糧 十九

禹餘糧がら大略一太さるの概粟れどく小さるのゆび  
かいられど一和産をまらう今の子良濃赤坂山小を

取れ物を父おせりゆらちむびうられしとく  
石中よ麵粉のじと白粉あり志せんし志めりけり  
甘一砂下取るる抱の黄去あり或は水あり上取るる抱  
白粉くそ山城大坂道橋おれ近山小あり九州  
神は渡ふまれよあり是ふ下取く横波れ山中小小  
イ石とよりてこれをう上取くそ外取くよあり和名  
シナダンゴ或はハタ石とよりては禹餘糧之イシナダンゴ  
卵抱りの

太乙禹餘糧 二十

太乙禹餘糧へあみそけり石中空虚之盡る石中に  
石等あり和名橋石岩赤石袋石といふ徳はよ





いとも大和生薬山より一穴をいけて酒を入おくよまめこ  
りよめて栲石の名あり又小なるものは槌栗れども小石を  
たくりよめて鈴石といふ丈あるは水は五升を入ぬ煎り外皮  
小石はなりつきてまじりて肌養うて漆がよし  
黄土小石及あをたくりよめて栲石の借机上の水入等小用也又近  
江野野海山内高島辺に聖正の寺山又江戸白根町細川屋敷  
又山姥山和泉の松田村れ山中よりあり

石中黄 廿一

石中黄和産を多し馬鈴根を生むる山より多く多し本邦  
あり石中黄といふ栲石よりあり馬鈴根或は石中黄を馬鈴  
根の白き細る栲石あり石中黄は黄土あり今某店は馬鈴根と

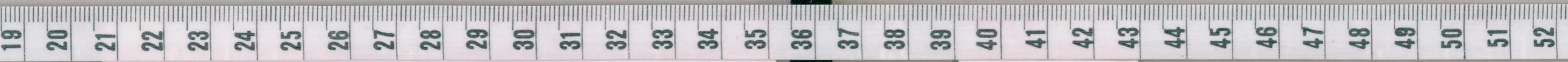
まら物おそろしは石中黄なり

石中黄子 廿二

石中黄子ハ馬鈴根れ白粉を多く水をたくりよめて  
濃玉茶坂山小近生しの馬鈴根をおよび山より多し馬鈴根乃  
いよめ濃くさら抱えといふ又其は馬鈴根の心より水をたくりよ  
めりもわり茶葉を考其は是を石中黄子とよまらん  
薬もらに馬鈴根石中黄石中黄子と種ハ一類なりて別種  
あり外皮ぬんありとて丸く鶏卵の大きさにして皮を剥  
取のころ皮を剥いて別抱え大なる抱え尺或は寸余あり卵  
石黄も亦別種の抱えらん

石膏

廿一





石膏和産多しを佳るり大山岩石の同し産を色白く  
やううううて光沢ある物を上品とすこれ別産智那宮宿  
此近山大塚村あり又奥尾南尾張玉千結つ又廿此近山  
或い石見玉ありあまは徳玉赤坂近山あり也

硬石膏 廿三

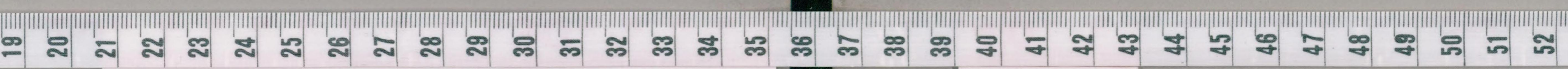
石膏と産らる山あり又別産を雪れよく白く  
小筋立馬の歯のごとく石とる此石あり也  
あつらひはる膏れわて記をいつて別物あるを志す  
茶用とあるものにあつらひ和産あり又在と  
徳玉赤坂の沢生山とすは赤市橋村谷氏此物お

あつらひはる膏れわて記をいつて別物あるを志す  
徳玉赤坂の沢生山とすは赤市橋村谷氏此物お

方解石 廿四

白沢とてをわて石膏と似石英と似り破割は毎方  
小解を故の方解とす業店とて是をき水とあや  
きあはりの塩れ種の方解をいす性ありわら又大  
るり近玉赤産を多し一玉品の懐中を尺山加賀白山を後  
山麓摩野の浮輪帯産す小あせり依波とすイヒキリと  
黄赤白黒もに玉あり

寒水石 廿五





水晶のよく塩に溶くものごとく白くしてやうらうらと  
塩に糖之和産するありかお湯をこえてはるる  
佐石本宿御嶽は松本後乃高松よりあり予  
掃下指のきり一名凝水石といふ

冷油石 廿六

江府田村先生予の冷油石を煮む紅毛園の産くところ白く  
れをこらぬらうてやうらうらとよぶるよきて冷るる  
小異なり或いは石あつち油の中へ入るふたしちと志  
かろやいなやを煮るは予伊勢は産水限破ありけい  
水限を煮といふ性冷油といはれおきくは種ありん

花蕊石 廿七

花蕊石和産する一有名花乳石ありといふも  
をやくか石かてうらうらとやうらうらと粟餅の色れごとく白  
こ星あり今依はれはるるおそ抱きする予  
上谷相栗山より青色白点れ軟滑なる石をもちりおきく  
これ青花乳石ありん

石鍾乳 廿八

葛山の窟よりありきく白く上よりさるる水柱れごとく  
照しるる時いふれごとく銀星あり一様  
産する穴は深きと園が嶽に石懸り大雲山  
奥伊豫山小松吉田山大洞信石本宿御嶽又白骨地獄谷  
窟下総お流山遠石岩お寺村岩水ち鏡内肥後益城  
山





越前越後佐波北山中<sup>こしやま</sup>あり大和金山<sup>おほやま</sup>山麓<sup>さんろく</sup>の  
 中<sup>なか</sup>産乳<sup>うぶち</sup>を菊<sup>きく</sup>花<sup>はな</sup>とる<sup>とる</sup>せり<sup>せり</sup>の<sup>の</sup>名<sup>な</sup>く<sup>く</sup>又<sup>また</sup>江<sup>え</sup>乃<sup>の</sup>甲<sup>か</sup>掛<sup>か</sup>山<sup>さん</sup>風<sup>ふう</sup>  
 穴<sup>あな</sup>あり<sup>あり</sup>は<sup>は</sup>玉<sup>たま</sup>乃<sup>の</sup>上<sup>の上</sup>部<sup>ぶ</sup>に<sup>に</sup>佐<sup>さ</sup>目<sup>め</sup>村<sup>むら</sup>あり<sup>あり</sup>予<sup>よ</sup>宝<sup>たから</sup>曆<sup>り</sup>八<sup>はち</sup>年<sup>ねん</sup>又<sup>また</sup>月<sup>つき</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>二<sup>に</sup>  
 至<sup>いた</sup>り<sup>り</sup>多<sup>た</sup>美<sup>み</sup>的<sup>てき</sup>神<sup>かみ</sup>より<sup>より</sup>み<sup>み</sup>里<sup>り</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>興<sup>おこ</sup>之<sup>の</sup>山<sup>さん</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>風<sup>ふう</sup>穴<sup>あな</sup>と<sup>と</sup>  
 あり<sup>あり</sup>て<sup>て</sup>つ<sup>つ</sup>ひ<sup>ひ</sup>又<sup>また</sup>風<sup>ふう</sup>を<sup>を</sup>生<sup>せい</sup>る<sup>る</sup>洞<sup>どう</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>二<sup>に</sup>丈<sup>じやう</sup>余<sup>よ</sup>幅<sup>はつ</sup>二<sup>に</sup>丈<sup>じやう</sup>余<sup>よ</sup>廣<sup>ひろ</sup>を<sup>を</sup>所<sup>ところ</sup>  
 あり<sup>あり</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>丈<sup>じやう</sup>も<sup>も</sup>あり<sup>あり</sup>一<sup>いつ</sup>町<sup>ちゆう</sup>ほ<sup>ほ</sup>ど<sup>ど</sup>狭<sup>せま</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>是<sup>こゝ</sup>れ<sup>の</sup>洞<sup>どう</sup>穴<sup>あな</sup>上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>方<sup>はう</sup>  
 右<sup>みぎ</sup>敷<sup>しき</sup>十<sup>じゆ</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>尺<sup>せき</sup>に<sup>に</sup>又<sup>また</sup>敷<sup>しき</sup>百<sup>ひやく</sup>ふ<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>町<sup>ちゆう</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>  
 を<sup>を</sup>由<sup>よし</sup>きて<sup>て</sup>い<sup>い</sup>場<sup>ば</sup>れ<sup>れ</sup>巢<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>く<sup>く</sup>量<sup>りやう</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>方<sup>はう</sup>角<sup>かく</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>  
 め<sup>め</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>興<sup>おこ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>見<sup>み</sup>流<sup>りゆう</sup>く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>人<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>  
 一<sup>いつ</sup>里<sup>り</sup>行<sup>ゆ</sup>て<sup>て</sup>よ<sup>よ</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>大<sup>おほ</sup>河<sup>が</sup>あり<sup>あり</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>埒<sup>ら</sup>邊<sup>へ</sup>へ<sup>へ</sup>  
 幸<sup>さい</sup>りと<sup>と</sup>志<sup>し</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>志<sup>し</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>紫<sup>むらさ</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>兼<sup>かね</sup>後<sup>ご</sup>方<sup>はう</sup>志<sup>し</sup>上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>一<sup>いつ</sup>寸<sup>すん</sup>





色あききらふるくこしくを種乳之上よりさうりたるい歩  
 粒れこくふま一圍るがさ一石二間或は一丈二丈ありて下  
 へそこ丸げられどくならずも何り支側へさるれあり浪の  
 下く流れどく或は牛馬の双背小似不動れ後史よれりそ  
 取林とてまは流りけしあく美とてまもま大さるけ  
 瓜よおまの何れとてま

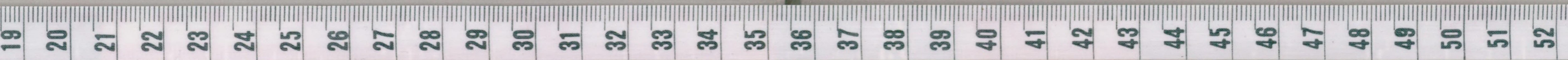
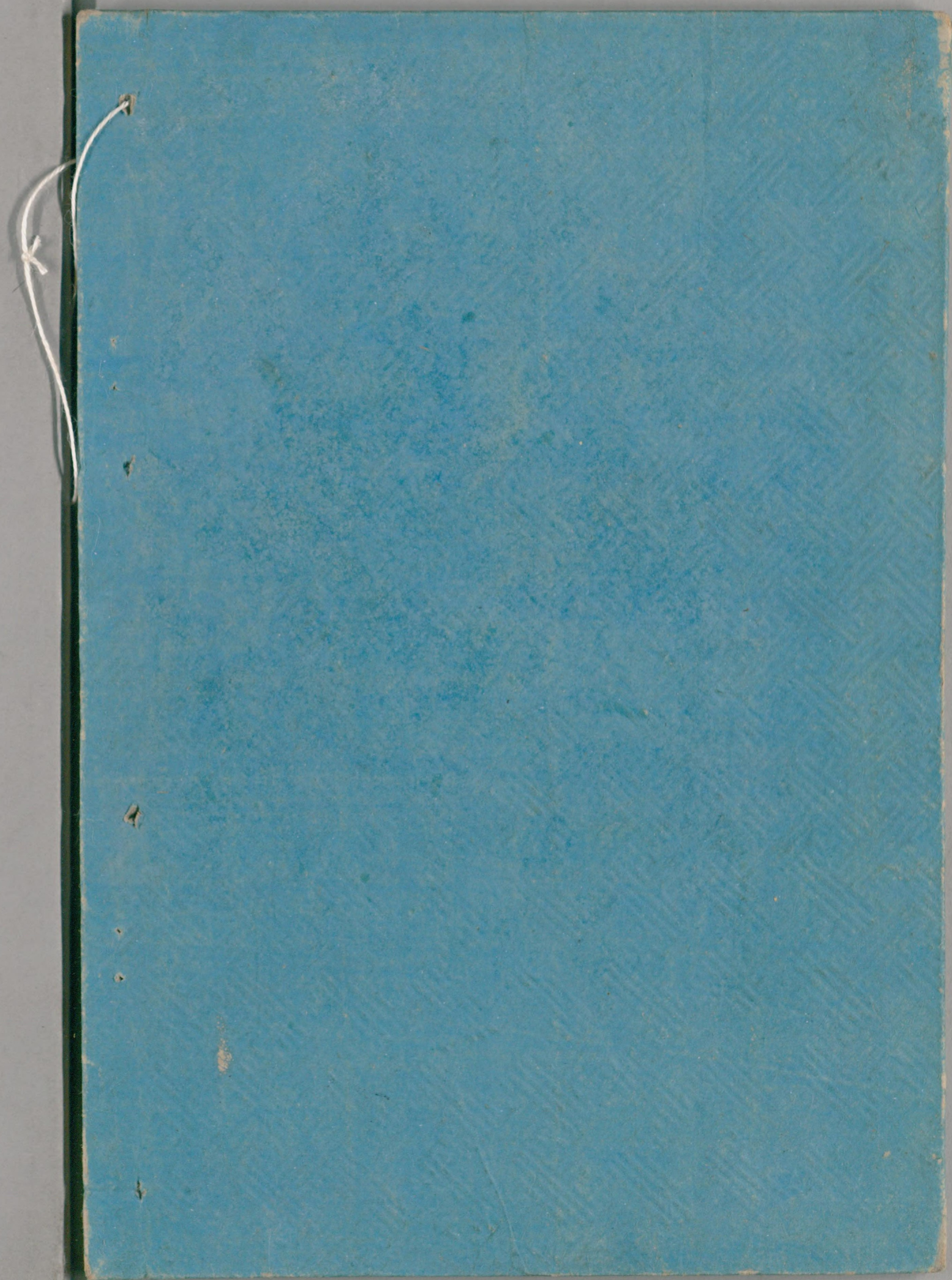
孔公孽 廿九

け類殺種とて種乳殷孽土殷孽孔公孽石床石花鷲管石等  
 皆別抱之今掃より略種乳石條下に著る相及鎌倉と孔公孽  
 ありと故先生の従之予係与玉よりゆくら抱き白く登く牛の  
 角れどく申孔通せり思くは是孔公孽と人或は下野玉尾山といふ

特1  
 1505







国立国会図書館 タイトル『雲根志 前編5巻』 請求記号 特1-1505

ガラス使用